

新約聖書の中の奥義 第14回

□この学び全体のアウトライン

第一部 イン트로ダクション

第二部 奥義としての神の国

第三部 教会に関する5つの奥義

第四部 **イスラエルが頑なになることに関連する奥義**

第五部 サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義

□ 第四部「イスラエルが頑なになることに関連する奥義」のアウトライン

A) ロマ9章・10章・11章の教え

I. イスラエル民族がメシアを拒否したことについての神学的理解 9:1~29

1. 9:1~5 パウロの悲しみとイスラエルの特権
2. 9:6~13 聖書の歴史に照らしてイスラエル民族によるメシア拒否を見る
3. 9:14~29 聖書の原則に照らしてイスラエル民族によるメシア拒否を見る
4. まとめ

II. イスラエル民族がメシアを拒否したことの説明 9:30~10:21

1. 9:30~33 イスラエルの躓き
2. 10:1~11 イスラエルは救いを受ける経路について無知であった
3. 10:12~13 イスラエルは救いの普遍的性質について無知であった
4. 10:14~21 イスラエルは福音が普遍的に宣べ伝えられることに無知であった

III. イスラエル民族がメシアを拒否したことの慰め 11:1~32

1. 11:1~10 イスラエル民族全員がメシアを拒否したわけではない
2. 11:11~15 イスラエルが躓いたことの意味
3. 11:16~24 オリーブの木
4. 11:25~32 **奥義**

IV. パウロの頌栄 11:33~36

B) ロマ16:25~27の教え

□前回までの流れ

1. 新約聖書の奥義に関する学びは、第四部「イスラエルが頑なになることに関連する奥義」に入っている。
 - (1) イスラエルが頑なになる とは・・・神の選びの民であるイスラエルが、イエスをメシアではないと拒否した出来事 を指す。
 - (2) 紀元 30 年の十字架刑からやがて 2 千年、いまだにユダヤ人たちは一部を除いて、イエスを旧約聖書が預言していたメシアとは認めていない。イスラエルの頑なな状態は現在にまで続いている。
 - (3) イスラエルが頑なになること自体は、奥義ではない。旧約聖書でも預言されていたことである。何が奥義なのか、それが第四部の中心テーマである。
 - (4) 第四部は、AとBの二つの区分をもつ。いずれも「ローマ人への手紙」からの学びであるが、Aの区分では9章から11章を、Bの区分では16章25～27節を扱う。
 - (5) 奥義は、Aの区分で、11章25節のところで扱う。イスラエルが頑なになったのは永久にではない。一時的である。いつまでかと言うと、それが奥義である。「異邦人の満ちる時まで」。その意味を学ぶのが、第四部の目的である。

2. Aの区分では、前のページのアウトラインにあるように、ローマ人への手紙9章から11章までを、IからIVの4カ所に分けて、学んでいる。

3. AのIでは、イスラエル民族によるメシア拒否について、**神の計画という視点から**見た。そこでのポイントは、次の4つの点である。特に②と④の二つが重要。
 - ① この出来事は神の計画の中にある。
 - ② 聖書が「イスラエル」というとき、**二つのイスラエル**が存在する。
 - 一つは、民族としてのイスラエル
 - もう一つは、その中に少数ではあるが、信仰あるイスラエル・・・信仰あるイスラエルは、「霊的イスラエル」、あるいは「イスラエルの残りの者（レムナント）」とも呼ばれる。
 - ③ 霊的イスラエルは、イエスの初臨以降の時代においては、イエスをメシアとして認め、信じるユダヤ人たちである。どれほどユダヤ教に熱心であっても、イエスをメシアとして認めないユダヤ人は、霊的イスラエルではない。
 - ④ イスラエル民族の中の誰が霊的イスラエルになるかどうかは、**神の選びによるのであり、神の主権のもとにある。**

4. AのIIでは、イスラエル民族によるメシア拒否について、**人の視点から**見た。神に熱心であったイスラエル民族が、なぜメシアを拒否したのか、その理由についてである。
 - (1) その理由は、**3つの無知（誤解）が連鎖した。**
 - ① まず、律法を持つことを誇り、律法を行うことで救いを得られると誤解した。
 - ② 律法を与えられたのは、全人類の中で、ユダヤ人だけである。よって、救いの対象はユダヤ人だけであると誤解した。これが、第二の誤解である。

- ③ 救いの対象はユダヤ人であるから、異邦人へ神の国の福音を伝える必要はない。福音宣教の対象もユダヤ人だけであると誤解した。これが第三の誤解。
- (2) イスラエルがメシアを拒否したのは、福音を聞かなかったからか？ また聞いてもわからないような難しいものだったからか？
- ① そうではない。イスラエルは確かに福音を聞いた。イエスにより、そして使徒ペテロたちにより、さらに使徒パウロにより、聞いた。
- ② そのとき、かたわらでは、異邦人たちが福音宣教を聴いて、理解して救いを受けた。このように異邦人に理解できるのに、イスラエルに理解できないはずはない。
- (3) しかし、神はイスラエルを見捨ててはおられない。今もイスラエルが立ち返るのを待っておられる。これが、前回の結論であった（ロマ 10 : 21）。

A) ロマ 9 章・10 章・11 章の教え

Ⅲ イスラエル民族がメシアを拒否したことの慰め 11 : 1~32

1. 11 : 1~10 イスラエル民族全員がメシアを拒否したわけではない

- (1) 1 節~2 節 a それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。決してそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の出身です。神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません。
- ① 1 節「それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。」・・・この問いに対する答えは、1 節と 2 節 a において、否定する内容を 3 回重ねる。
- 「決してそんなことはありません」・・・これはとても強い口調の表現で、「そのような考えは捨ててしまえ！」というようなニュアンス。
 - 「この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の出身です」・・・パウロは、イスラエル人である自分も救われたのだと、実例を挙げる。
 - 「神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません」
- ② 「前から知っていた」とは、予め知っていたということ。イスラエルが神に背を向けたり、メシアを拒否するであろうことを、神はあらかじめ知っておられたうえで、イスラエルをご自分の民として選ばれた。
- ③ 旧約聖書は、イスラエルが神に背を向けた歴史で満ちている。しかし、その間、神は決してイスラエルを見捨てなかった。その歴史的事実の中から、パウロは、預言者エリヤの時代にあった実例を、次の 2 節の後半から 6 節で述べる。

(2) 2節b～6節 エリヤはイスラエルを神に訴えています。「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを狙っています。」しかし、神が彼に告げられたことは何だったのでしょうか。「わたしは、わたし自身のために、男子7千人を残している。これらの者は、バアルに膝をかがめなかった者たちである。」ですから、同じように今この時にも、恵みの選びによって残された者たちがいます。恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。そうでなければ、恵みが恵みでなくなります。

- ① 2節b～4節：パウロが旧約聖書の中からこの実例を取り上げた理由は、下線部である。神が神ご自身のために、信仰あるイスラエルを残しておられる、ということを示すためである。
- ② 5節：過去だけでなく、二重下線部「今この時にも」とパウロは述べる。過去においても、そして今も、神はイスラエルを見捨てることなく、少数ではあるが、信仰あるイスラエルを残しておられる。これは、神が決してイスラエルを退けないことの証拠である。
- ③ 5～6節：誰が信仰あるイスラエルとして残るのか、それは波線部。「恵みの選びによる」ことであり、本人の行いによるのではない。
- ④ 神の恵みによって選ばれ、信仰を通して救われた者たちが、神によって強くされ、その信仰を現わして、「バアルに膝をかがめなかった」となる。この順序が大切である。決して「バアルに膝をかがめなかったから、救われる」というのではない。それでは、行いによって救いを得たことになり、神の恵みではない。
- ⑤ 誰が信仰あるイスラエルとなるのか、AのIでは、神の選びであり、神の主権のもとにあることを見た（P2 番号3を参照）。ここでは、【神の選びは、神の恵みによるのであって、その人の行いによらない】とパウロは教えている。人の行いによらないから、その人が生まれる前から選ばれるのである（ロマ9:11）。

(3) 7節 では、どうなのでしょう。イスラエルは追い求めていたものを手に入れず、選ばれた者たちが手にいれました。ほかの者たちは頑なにされたのです。

- ① イスラエル民族は、追い求めていた義を得なかった。
- ② 選ばれた者たち、すなわち信仰あるイスラエル、レムナントは、義を得た。
- ③ ほかの者たち、すなわちイスラエル民族のうちレムナントではない人々は、頑なにされた。この点は、あとで「奥義」につながる一つ目の伏線となる。

(4) 8節～10節 「神は今日に至るまで、彼らに鈍い心と見ない目と聞かない耳を与えられた」と書いてあるとおりです。ダビデもこう言っています。「彼らの食卓が、彼らにとって罨となり、落とし穴となり、つまずきとなり、報いとなりますように。彼らの目が暗くなり、見えなくなりますように。その腰をいつも曲げておいてください。」

- ① 今日に至るまで、まさに私たちの時代に至るまで、イスラエルによるメシア拒否は続いている。それは旧約聖書において預言されていた。
- ② 旧約聖書で明らかになっていたことであるから、イスラエルが頑なになること自体は、奥義ではない。

2. 11：11～15 イスラエルが躓いたことの目的

(1) 11 節 それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。

- ① 11 節「それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。」・・・この問いは、9 章 30～33 節でパウロが述べたこと、イスラエルはつまずいた、メシアはイスラエルにとってつまずきの石となった、という点とつながっている。イスラエルはつまずいたけれども、イスラエルはもう二度と立ち上がることはないのか、という問いである。
- ② その答えは、「決してそんなことはありません」。11 章 1 節と同じ、とても強い口調の表現で、「そのような考えは捨ててしまえ！」というようなニュアンス。
- ③ イスラエルが倒れたことで、救いが異邦人に及んだ。これは事実である。
- ④ 神が異邦人を救うのは、イスラエルにねたみを起こさせるためである。
- ⑤ つまずき倒れているイスラエル民族の中から、一部のイスラエル人が、異邦人を見る。異邦人が救われ、神の祝福を受けているのを見て、ねたみを起こす。なぜ、義を追い求めていなかった異邦人が聖書の真理を喜び、神をほめたたえるのか、そして神の祝福を受け、あれほど幸せそうにしているのか、それは何ともねたましい、と感じる。そして、「イエスは、本当はメシアなのか？」と近づいて来る。かくして、信仰あるイスラエルとして導かれる、という筋道である。

(2) 12 節 彼らの背きが世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らがみな救われることは、どんなにすばらしいものをもたらすことでしょうか。

- ① パウロは、ここで、**部分 [=7 節の選ばれた者たち]** に対して、**全体 [=彼らがみな]** を対照させる。
 - **部分**は、現在の状態、イスラエル民族全体の中の一部、信仰あるイスラエル、レムナントである。7 節の「選ばれた者たち」である。
 - **全体**は、将来のイスラエル民族全体。「彼らがみな救われる」とは将来起きるイスラエル民族全体の民族的救いである。**民族全体が救われる、その数が満ちる**ということである。
 - これは、**あとで「奥義」につながる二つ目の伏線**となる。
- ② イスラエル民族全体の民族的救いは、奥義ではない。それは、旧約聖書でも知られていた。

- (3) 13節～14節 そこで、異邦人であるあなたがたに言いますが、私は異邦人への使徒ですから、自分の務めを重く受けとめています。私は何とかして自分の同胞にねたみを起こさせて、彼らのうち何人かでも救いたいのです。
- ① ここでパウロは、異邦人を救うことの目的をもう一度述べている。「自分の同胞にねたみを起こさせる」である。そして「彼らのうち何人かでも救いたい」である。ユダヤ人の救いのためである。
- ② したがって、パウロは異邦人への使徒としての自分の務めを重く受とめると述べる。異邦人を救いに導けば導くほど、同胞のユダヤ人たちのねたみを起こさせることになる。したがって、より多くのユダヤ人が救われる。
- (4) 15節 もし彼らの捨てられることが世界の和解となるなら、彼らが受け入れられることは、死者の中からのいのちでなくて何でしょうか。
- ① イスラエルが捨てられること、イスラエルがつまずき倒れたことで、異邦人に救いが及んだ。救いはユダヤ人だけでなく、異邦人にも与えられる。世界はユダヤ人と異邦人とから成るから、世界が神との和解を得たのである（ロマ5:10）
- ② イスラエルが受け入れられることは、「死者の中からのいのち」である。
- これは、当時のユダヤ教ラビがよく用いた論法のひとつで、「小さなものから大きなもの」への論及である。
 - 「死者の中からのいのち」とは、比べ物にならないくらい価値に差があるということ。「死者」の価値は小さい、「いのち」は死者に比べるなら比べ物にならないくらい価値が大きい。
 - イスラエルが捨てられて、神と世界との和解という素晴らしいことが起きた。まして、イスラエルが受け入れられるとなったら、それがもたらす祝福はどれほど素晴らしいか、それはもう比べ物にならない。
 - イスラエルがイエスをメシアとして認め、民族的救いを受けて、神に受け入れられて、約束の地に帰還するなら、メシアの王国が地上に現れる。そのとき、異邦人はどれほどの祝福を受けるのか、今とは比べ物にならないほど素晴らしい祝福を受けるであろう。
- ③ まとめると、次のような順序になる
 イスラエルのつまずき→異邦人の救い・異邦人は祝福を受ける
 →イスラエルの中からねたみを起こしてユダヤ人の部分的救い
 →（ある時点で）イスラエル民族全体が救われる＝イスラエルが受け入れられる→メシアの王国・異邦人はもっと大きな祝福を受ける
- ④ このようにして、異邦人の救いとユダヤ人の救いは関係している。この点は、**あとで「奥義」につながる三つ目の伏線**となる。